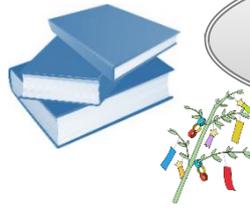


あれこれかあ



ICHIKAWA LIBRARY

参考業務月報

2024年7月号

発行：市川市中央図書館 編集：レファレンスカウンター 〒272-0015 市川市鬼高1-1-4 Tel. 047-320-3346

	INF	REF	こども	電話	メール	中央計	行徳	BM	南行	信篤	平田	駅南	全館計
7月	862	474	497	55	6	1,894	798	56	177	214	96	560	3,795
累計	3,294	1,827	1,896	382	17	7,416	2,915	236	672	960	370	1,975	14,544

INF:インフォメーション・カウンタ REF:レファレンス・カウンタ BM:自動車図書館

📄 今月のレファレンス記録票から

分類

質問と内容

521.8 江戸時代、武士では身分によって屋敷の門が違ったようだが、武士、町人、商人のそれぞれの身分でどのように門が異なっていたか知りたい。

『さがしてみよう日本のかたち 5 民家』（日弁貞夫／写真 立松和平／文 山と溪谷社 2003）p.34 に、具体例として奈良県中家を挙げ、「中家の内濠に架かる狭い橋を渡ると、長屋門形式の表門に迎えられる。長屋門とは武家屋敷の門であり敷地の周囲にめぐらせた長屋の一部を開いて門としたものである。江戸時代には、身分や禄高によって門の形式が定められていた。国持大名は独立した門を構えることができたが、それ以下の武家では、梁間の長さや門の形式、脇に付く番所の屋根、塗装の色まで厳格に決められていた。」と、身分による差位があったことが記載されている。

『大江戸復元図鑑 武士編』（笹間良彦／著画 遊子館 2004）p.24 「幕臣の屋敷の門構え」の項に「幕臣の住む屋敷には、家格や家禄によって門構えや屋敷の外周に規定があった」との記述があり、各門の説明と門を開くのはどのような時か、主人、客、奉公人や庶民、商人で門から出入りできるかどうかの別、門から玄関までについての記述がある。p.34 「大名屋敷の門構え」の項には、石高の別の他、自邸からの失火や類焼で焼失すると同じ門は再建を許されないなどの記述や、将軍家から娘を嫁にもらった大名に許された朱塗りの門や将軍を迎えるための御成門についての記述がある。

また、近世の建造物の門について『民家と町並み』（青木義脩・毛利和夫／執筆 吉田靖／監修 山川出版社 2001）p.14 に「門や塀は階層・身分のステータス・シンボルのようなもので、元来武家階級に限られたものだが、江戸時代になると村役人（庄屋・名主）クラスの上層農民にも許されるようになった。（中略）門は上層身分の長屋門・冠木門や一般住宅では腕木門など建造物らしい構えのものが好んでつくられた」「中級以下の武家や庄屋屋敷などは茅葺き屋根などの素朴な長屋門も見られる。薬医門は城門・寺門によく見かけるが、武家屋敷・庄屋屋敷などでも見かけられる。」「下級武士の家は簡単な腕木門や冠木門が多い」との記載があり、武士のそれぞれの階級による門の違いが述べられている。

房総武家屋敷の長屋門を詳細に調査した探訪・写真資料『房総の長屋門 1695 山里の思い出、村の記憶』（民家・長屋門研究会 2022）p.15 に「長屋門は武家屋敷の表門として江戸時代に形式が整い、門の左右に居室を造り家臣や小者達の住む長屋として屋敷を囲っていた。大名家でも城持ちか否か、本家か分家か石高などにより厳しい規定があった」と、階層により許された様式が定められていたことが記載され、p.16 には「様式別の魅力と個性」と題し、長屋門の具体的な様式として武家流れ・商家構え・農家重宝などについて以下の通り記されている。

「武家流れ 様式上の要として『門扉（鏝金物）・武者窓・番人窓』が揃って現存すること。（中略）家系は小金牧の牧士や名主など苗字・帯刀を許された士分格の家柄。」「商家構え 酒・味噌・醤油など醸造に関する家業を営むところで発生している。商いの場に長屋門を直接使ったもの、帳場を別にしたものに分かれる。」「農家重宝 出入口以外の開口部は規制され、特に正面は

ご法度…百姓一揆などで防御に使われることを恐れた。使用人や隠居部屋に使い始めたのは武家支配が無くなった明治以降で、窓も開けられるようになった。」

さらに p.18 には階級における規定に関する記述があり、「長屋門は武家の格に応じて許される意匠が異なっていた。「要筐辨志・三」や「青標紙」には本家の国持大名は独立した門に入母屋造り・唐破風造りの詰め所を付けることができ、10万石以上であれば長屋門に切妻又は唐破風造式の出間を付けることが許され、5万石以上は一方張り出し番所、他方出格子付まで、1万石以上は両方出格子付まで等規制されていた。また平屋建長屋門と二階長屋門とでも格が違うと言われる」（日本建築学会計画系論文集第82巻第736号2017年6月安武・大槻・深見、『日本の民家 第4集』（宮沢智士／著 学習研究社 1981.5）より引用）と記載されている。なお、元資料として挙げられている「要筐辨志（要筐弁志年中行事）」「青標紙」はデジタル画像を国書データベース (<https://kokusho.nijl.ac.jp> 2024/11/22 確認) で閲覧することができる。

大名の家格と門の形式を表した同様の表が、『大名の江戸暮らし事典』（松尾美恵子 藤實久美子／編 終風舎 2021）p.560にも確認された。

383.1 『最新名曲解説全集 5巻』にあるワルトトイフェル作曲「スケーターズ・ワルツ」の概説に記述されているような、19世紀後半ヨーロッパ上流階級のスケート文化に関する風俗画・写真・書籍が知りたい。

『最新名曲解説全集 5巻』（音楽之友社 1980）p.153-154に、「十九世紀の後半、パリでワルツに劣らず流行していたのはスケート。当時の風俗画には、クリノリン・スカートに毛布のオーバーを羽織り、両手を毛皮のマフに入れて、池に張った氷の上を滑る淑女たちの姿がよく描かれている。」と当時のスケート文化が記されており、これらを著した資料として以下を紹介した。

『装いのアーカイブズ ヨーロッパの宮廷・騎士・農漁民・祝祭・伝統衣装』（平井紀子／著 日外アソシエーツ 2008）の第6章「スポーツ服・遊戯服」の中のp.198-201「アイス・スケート」に、「優雅なスケートイング 1876年」という図版と、図版解説があり、当時流行の衣装でスケートをする女性が描かれている。

『西洋服飾史 増訂版』（丹野郁／編 東京堂出版 1999）には、大きく広がったクリノリン・スカートに外套、マフの写真（p.183 第398図「クリノリン衣装」）が記載されている。

『19世紀フランス光と闇の空間』（小倉孝誠／著 人文書院 1996）p.247-252「スケートの快楽」に、ブローニュの森のスケートについて、「華やかな社交場の一つ」とあり、図73「ブローニュの森のスケーターたち」には大勢の市民がスケートをする様子が描かれた図画が掲載されている。

また、『ルノワール 幸福の画家』（ジル・ネレ／著 [Reiko Watanabe／訳] タッシェン・ジャパン 2010）p.23に「ブローニュの森でスケートをする人々」という油絵が掲載されている。

他にもこんな質問ありました（クイック・レファレンスから）

分類	質問	⇒ 回答、補足事項、蘊蓄など
I/B6	市川市の大洲地域の歴史について、宅地化される前の状況や、明治から昭和にかけての地図など、町の変遷についてわかる資料はあるか⇒宅地化される前の状況などが分かる資料として、『地図に刻まれた歴史と景観 2 明治・大正・昭和 市川市・浦安市』（小室正紀／編著 新人物往来社 1992）、『校歌は生きている』（市川市教育委員会 1987）、『図説 市川の歴史 第2版』（市立市川考古・歴史博物館／編集 市川市教育委員会 2015）、『市川市史 第4巻 現代・文化』（市川市史編纂委員会／編集 市川市 1975）等を紹介した。また、明治から昭和にかけての地図として、「市川驛」（参謀本部陸軍部測量局 明治13年測量 1887）、「船橋 正式二万分一地形図 1907」（大日本帝国陸地測量部 明治36年測図 1907）、「明治前期関東平野地誌図集成 1880(明治13)年～1886(明治19)年」（地図資料編纂会／編集 柏書房 1989）等を紹介した。	
282.2	『李陵 山月記』（中島敦／著）以外で蘇武について書かれた本が知りたい⇒『中国歴史人物選 第2巻 ゴビに生きた男たち 李陵と蘇武』（富谷至／著 白帝社 1994）、『文選 詩篇5』（[蕭統／撰]、川合康三／[ほか] 訳注 岩波書店 2019）p.251-258「與蘇武三首」、p.258-271「詩四首」、『史記 武帝紀6』（北方謙三／著 角川春樹事務所 2011）、『平家物語 全訳注1』（杉本圭三郎／[全訳注] 講談社 2017）p.461-470「巻第二 蘇武」などを紹介。	